

<書評>ボヤン・ヒシグ著 『私はモンゴル人』

松下, 奈津美 / マツシタ, ナツミ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

65

(開始ページ / Start Page)

146

(終了ページ / End Page)

146

(発行年 / Year)

2002-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020216>

ボヤン・ヒシグ著

『私はモンゴル人』

松下 奈津美

モンゴルは果てしなく広がる草原の国、遊牧民が羊と共に移動しながら「ゲル」の中で暮らす。日本人にとって「モンゴル」の知識はほぼそれだけだ。

中里豊子氏は日本人ソプラノ歌手としてモンゴルの草原を舞台にして歌う。日本の歌を、イタリアの歌を、モンゴルの歌を。風の音と歌声が調和し、草原をなでるように波長が伝わっていくことを想像すると、なんて贅沢な空間なのだろうと思わず目を閉じて空想に耽ってしまった。どうしようもなく大草原へ行きたくなった。

ボヤン氏は中里氏が語る「モンゴル」を日本語で書く。タイトル「私」は、ボヤン氏であり、中里氏である。両者には「差異」が全くない。「私」という語は何も自分一人だけを指す言葉なのではないことが証明されているようである。ボヤン氏が語るモンゴルと中里氏が語るモンゴル。「私はモンゴル人」と胸を張って言える中里氏は国境という与えられた枠組みを簡単に突破している。音楽という世界共通語を使って。ボヤン氏は本書を日本語で書いてはいるが、我々が感動する琴線は何語で歌っても同じなのだと訴える。世界共通語を日本語で表現する。氏の日本語での二作目の作品であり、「私」を表現するという意味で挑戦だ。「自分はこんな事をこんなふうに表現したい」の出来ない歯がゆさ。母国語以外で何かを表現するとき

には必ずもどかしさがどこまでもつきまとう。本当は母国語で表現するよりも的確に言い得ているかも知れないのだが、「よい表現」を求めてしまう。留学したり外国語に親しんだ人なら誰でもある経験である。そこを、ボヤン氏は「ノンフィクション」という形式にし、忠実に中里氏の世界共通語を日本語に翻訳し、そして自らも「モンゴル人」として、モンゴルの大自然を世界共通語に置き換えて表現する。この時、世界共通語は風であり、音楽なのだ。日本語で書かれているのは、我々読者側の便宜上、書かれただけなのである。「グローバリゼーション」、「国際理解」、「国際関係」、「国際化」：各国が互いに理解を示そうではないかという風潮が流行る中、「国際化」などという言葉は、お互いを理解することが出来ない人間が作った言葉なのではないかと思うくらい、「国際化」を実現するのは実は頗る簡単だということが分かってしまう。我々は言語や文化という壁を作ってしまったているのだ。

風と音楽が存在する限り、中里氏、ボヤン氏は広島、四川、東京、どこにいてもそこはモンゴルである。「風は世界を旅する空気である」とボヤン氏が語るように、どこにいてもモンゴルの風は吹き、音楽が響く。そうだ、ボヤン氏が言う「株式会社 オフィスのような」大学院棟でもモンゴルの風を感じ、「私はモンゴル人」と言うことは出来るのだ。大草原へ行ったくなる気持ちを私は抑えた。

(まつした なつみ・二〇〇〇年修士卒)

▽二〇〇一年十月・講談社・一六〇〇円

△著者Ⅱ一九九八年修士卒